

## 助産婦が行う性教育の有効性に関する研究

高山赤十字病院産婦人科病棟

育成期看護学講座

井上京子、林真由美、田中みどり

原谷律代、

服部律子、堀内寛子、藤迫奈々重、

清水智美、兼子真理子

### [研究の背景と目的]

高山赤十字病院産婦人科病棟では、高山市立西小学校PTAからの依頼を受けて、平成10年度より助産婦が小学校に出向き、小学校6年生とその保護者を対象に性教育を行っている。また大野郡宮村では教育委員会からの依頼で、宮村の保育園児とその親、小学校4～6年生の親、中学生の親をそれぞれ対象に行う3つの性教育講座を担当している。このように高山赤十字病院では、病院の助産婦が直接地域の学校に出向き、助産婦としての経験から子ども達に、今必要とされている命の誕生と性教育を実践してきている。今回の研究では、小学6年生対象の性教育講座の実践を通して、助産婦が性について子ども達に語る意味を考え、助産婦の専門性に立脚した性教育の有効性を検討することを目的としている。さらに施設の助産婦が地域に直接出向くことにより、助産婦活動がさらに発展し地域住民の性の健康に貢献することを実証していきたい。

### [性教育講座の実践内容]

西小学校6年の子どもと保護者を対象とした。平成13年12月に助産婦2名看護婦1名によって実施した。

**導入** 担任の先生に姪御さんが産まれたこと、皇太子妃雅子様にも女の子が産まれたことなどを話していただき、児童へ命の誕生への導入とした。

**助産婦の講義** 助産婦という仕事の紹介は、病棟や外来の診察場面、出産場面、新生児などの写真を用いた。受精から妊娠についてはビデオや妊娠経過に関する図を使った。また

胎児模型も使い、妊娠中の胎児の様子を離した。

**体験コーナー** 妊婦体験（妊婦体験服の着用）、羊水体験（実際の羊水の温度と同じぬるま湯を

さわる）、赤ちゃんの人形のだっこ（新生児の人形をだっこしたり、哺乳やおむつ交換をした）、実物の胎盤を見て触る体験（病院から実際の胎盤をもっていき、使い捨ての手袋をして、胎盤や臍帯をさわった）。子ども達は4グループに分かれ、各5分間ずつ体験した。ここまでは親子で参加した。

**保護者と座談会** 子ども達の下校後、参加した保護者と話し合いをもった。テーマは「思春期の心と体」であった。内容は、最近の思春期の子ども達の風潮（初体験年齢の低年齢化、思春期の子ども達の妊娠・出産、STDの増加、援助交際・出会い系サイトなどの問題）を話し、自分を大切にすること他人を大切にすることを教えてほしいことをベースに、家庭での性教育の悩みなどであった。

### [性教育講座の評価方法]

評価には助産婦が作成した質問紙を用いた。子ども達には講座の前日に担任から質問紙の記入を児童に依頼した。質問の内容は「自分の産まれた時の話を聞いた事がありますか」「誰から聞きましたか」「どうしてできるか知っていますか」「赤ちゃんがどこからできるか知っていますか」「命ということを聞いてどんなことを思い浮かべますか」などである。講座後は「自分が産まれたときの話を聞きたいと思いましたか」「赤ちゃんがどんなふうに成長していくのかわかりましたか」「赤ちゃんがどうしてできるのかわかりましたか」「産んでくれたお母さんにどんな気持ちを持ちましたか」「命ということを聞いてどんなことを思い浮かべますか」などである。また保護者については授業前アンケートでは「性教育は誰が行うのがよいと思いますか」「今まで家庭で生のお話をしてきましたか」「お子さんがお腹にいる時の話や、産まれたときの話をしたことがありますか」などであり、講義後のアンケートでは「授業のなかで一番印象に残ったことは何ですか」「お子さんが産まれたときの話を話

してみようと思いましたが、どんなことを話してあげたいですか」「性教育は誰が行いのがよいとおもいますか」などである。保護者の授業前アンケートは家庭に持ち帰り記入してもらったため、男子の親 24 名、女子の親 20 名、計 44 名から回答があった。回答はすべて母親であった。

## 【結果と考察】

### ① 参加者

小学校 6 年生 男子 23 名、女子 20 名 合計 43 名であった。保護者は、母親 38 名、父親 1 名 合計 39 名であり約 91% の保護者が参加していた。

### ② 授業中の参加者の反応

授業での子どもたちの反応であるが、まずとても素直に授業を受け入れてくれたという印象であった。質問に対する反応もよく、話を真剣な眼差しで聞き、VTR の赤ちゃんを見て、「かわいい！」を連発していた。体験コーナーも、生き生きとしていた。胎盤は、最初おそるおそるであったが「うわあ。気持ち悪い」などといながらもみんながさわってくれた。臍帯や卵膜をみて「これがお母さんと赤ちゃんつないでいるのか」「血管がある！」「この膜で赤ちゃんが包まれている」「温かい羊水の中に赤ちゃんは浮かんでいるんだ」などと興味深くさわっていた。どのコーナーも男の子は照れくさいのか、ふざけたり、面白半分のような感じだったが、女の子は真剣にまじめにやっている子が多いようだった。母親も、出産の VTR で涙ぐむひとや、胎盤をさわって、「生んだときにみてないから見せてもらってよかった」「自分のもみておけばよかった」という言葉も聞かれた。授業の後に体験することによって、授業がより生きたものになったのではないかと思われた。

次にアンケートにより子ども達や保護者の反応や学びを分析した。

### ③ 授業後の子ども達の反応—自分がおなかの中にいた時や産まれてくる時のこと—

授業前アンケートでは「お母さんのおなかの中にいる時の話や、産まれた時の話を聞いた

ことがありますか」について男子は 23 名中 19 名、女子は 20 名中 18 名があると答えていた。聞いたことがない男子 4 名は全員「話を聞きたいと思わない」と答えていた。女子 2 名は 1 名が「聞きたいと思う」1 名が「聞きたいと思わない」と答えていた。

授業後は「おなかの中にいた時のことを聞いてみたいと思った」子どもは 43 名中 33 名であった

授業後の反応を表 1 に示した

子どもの反応は「自分が母親の胎内にいた時の様子」と「自分の出産時の様子」の 2 つに分けられた。妊娠中のことでは、「おなかの中でどうしていたのか」「おなかの中でのこと」「私がおなかの中にいたときあばれていたのか」「けったりしたのか」などであった。出産については「産まれてくる時の様子」「痛かったのか」「大変だったか」などがあった。

表1 授業終了後の児童の反応  
(自分のお腹の中での様子を聞きたい)

内 容	名 (%)
お腹の中でのこと	10(23.3)
お腹の中にいた時の様について詳しく	3(7.0)
どんな様子だったか	1(2.3)
どんなふうにしたか	1(2.3)
どんな感じでいたか	1(2.3)
どんなふう動いたか	7(16.0)
重かったのか	4(9.3)
けったりしたか	1(2.3)

授業終了後の児童の反応

(自分が生まれるときの様子を聞きたい)

内 容	名 (%)
生まれてくる様子	3(7.0)
どんなふう痛かったのか	1(2.3)
生まれるとき大変だったか	1(2.3)
生まれたときのこと	2(4.7)
感想	1(2.3)
全部	2(4.7)

④ 妊娠出産への知識について

授業前のアンケートによると「どうして赤ちゃんができるか知っていますか」という設問に対して、男子の約 40%、女子の約 50%が知っていると答え、残りは「知っているが正しいかわからない」「知らない」であった。授業後のアンケートでは男女とも 100%の子どもが「わかった」と答えていた (図 1)。

次に「赤ちゃんがどこから産まれてくるのか知っていますか」という設問に対しては、授業前では男子の約 40%、女子の約 50%が知っていると答え、残りは知っているが正しいかわからない「知らない」であった。この問いに関しても、授業後のアンケートでは男女とも 100%の子どもが「わかった」と答えていた (図 2)。また授業後に「どうして赤ちゃんができるかわかりましたか」という問いで「わかった」と答えた子どもに、「それは今まであなたが考えていたことと同じでしたか」ということを聞き、知識の不確かさを確かめたところ、男子の約 21%、女子の約 23%が「違っていた」と答えていた (図 3)。これらのことから今回の性教育の授業は、子ども達の妊娠から出産までの知識を確かなものにするのに、効果があったと考えられる。

図1 どうして赤ちゃんができるのか知っていますか

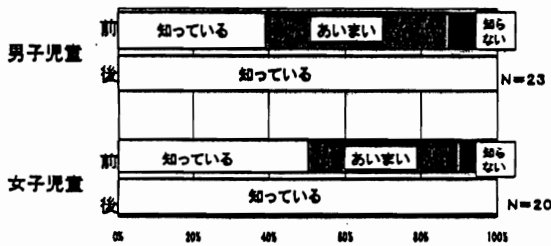


図2 どこから赤ちゃんが生まれてくるのか

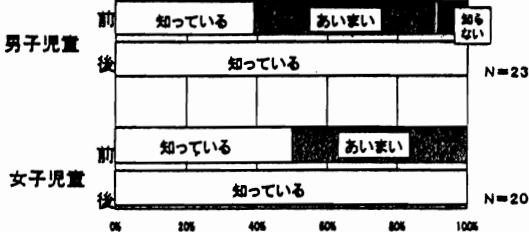
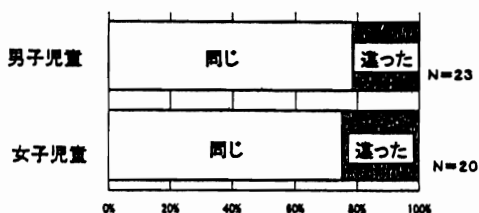


図3 事前の知識の不確かさ



⑤ 「命 (いのち)」からの連想

授業前と後での「命 (いのち)」ということへの子ども達の思いについて比較してみた。記述内容で分類すると授業前では、「大切なもの」という抽象的で短い表現が多かったが、授業後には記述が長くなり、内容も多くなった (表 2) 授業後には、命についてより具体的な捉え方が多くなり、子ども達のイメージが広がったことが考えられた。

表2 いのちと聞いて何を思い浮かべるか

授業前	授業後
大切なもの	大切なもの・親からもらった大切なもの
生まれる命 赤ちゃん	自分そのもの・ひとつだけの自分の命
生きていること	赤ちゃんの命
心	何万分の1で産まれるから大切にしたい
コソコソ、アツガン	生きているということ
大事なこと	お母さんが大事にして産んでくれた
体の中の愛の命	親のくれたいのちを捨ててはいけないと思った
あなたか	心臓のこと
生か死がよくわからない	人間
	いろいろと言葉を積み重ねてできたもの
	赤ちゃんがお腹の中にあること
	人の誕生
	新しい生命の誕生とお父さんとお母さんが二人
	で協力して産まれてくる
	人・花・動物・木
	人のことを思うために大切なもの
	成長していくこと
	あなたかくてすごいこと

⑥ 保護者が子どもに話したいこと

保護者の授業前のアンケートでは、「今までに子どもがお腹にいた時や産まれた時のことを話したことがある」という問いには、男子の親 19名 (79%) が「ある」と答えていた。女子の親では、18名 (90%) が「ある」と答えていた。全体でも 84%の親 (母親) が自分の子どもが産まれるときのことは、話したことがあった。しかし第 2 次性徴や性行動、性被害など「性についての話」については今まで話したことがあると答えた母親は、男子 10名 (42%)、女子 9名 (45%) であり、全体で 43%と子どもの産まれた時の話に比べると、少なかった。話した内容は、月経の話、第 2 次性徴にみられる体の変化が多かった。

授業後のアンケートでは「お子さんが産まれたときの様子を話してみようと思いましたが」という問いに対し、2名を除く 37名 (95%) が「思った」と答えていた。「どんな話をしておきたいですか」という問いには、記述内容を分類すると、4つに分けられた。

ひとつは、『命の大切さ』ということであり、「命を粗末にしないように」「自分の命も他人の命も同じように大切」「何万個の中から選ばれて産まれてきた命の大切さ」などの記載があった。次に『家族にとってあなたは大切』という内容であった。「望まれて産まれてきたこと」「子どもの存在が家族の絆を深めた」「家族の力で産まれ育った」などの記載であった。次に『子どもが産まれた頃の話』という内容であった。「お腹の中にいたときのこと」「産まれた時の気持ち」などの記載があった。最後に『あなたを産んだ母親のきもち』ということがあげられる。「産む時は痛かったけど頑張って産んだ」「お産は大変だった」などの記載があった(表3)。

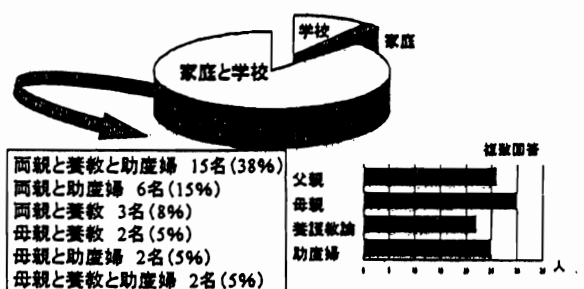
表3 子どもに話したいこと

命の大切さ	命を粗末にしないように、自分も他人の命も同じように大切 何万個の中から選ばれて生まれた、命の大切さ
家族にとってあなたは大切	望まれたうまれてきたこと 子どもの存在が家族の絆を深めた 家族の力で産まれて育っていったこと
子どもが産まれた頃の話	お腹の中にいた時のこと、家族の様子 生まれた時の気持ち、赤ちゃんの頃、
あなたを頑張って生んだ	大変だった、痛かった、頑張って生んだ

### ⑦ 性教育は誰が行うか

授業前のアンケートでは、「性教育を誰が行うのがよいか」という問いには、「家庭と学校で行うのがよい」という回答が最も多く35名(80%)であったが、その内訳をみると、助産婦と保健の先生(養護教諭)と両親または母親・父親とするものが17名(49%)であったが、授業後には「家庭と学校で行うのがよい」は34名(87%)であり、学校に助産婦を含める回答が26名(74% 不明4名を除く)と授業前に比べて増加した(図4)。

図4 性教育を誰が行うのがよいか



⑧ 保護者の授業への感想・印象に残ったこと  
保護者の感想では、「一生懸命な子どもの態度が印象的だった」「本物の胎盤に触ったり、いろいろな体験をしたことがよかった」助産婦さんの話がよかった「赤ちゃん誕生のビデオは感激した」などの意見がみられた。

### 【まとめ】

命の誕生にかかわる専門職として施設内の助産婦が、地域の小学校に出向き、その専門性を生かした、「生命の尊重について」という授業を行った。小学校6年生の児童と保護者を対象に、妊婦体験や実際の胎盤に触れたり、新生児の人形を抱いたりする体験を交えた授業を行い、その後、保護者と「性について」の座談会をおこなった。授業の評価をするために、授業前と授業後のアンケートを児童・保護者それぞれについて行い、その内容を分析した。その結果、子ども達の授業後の反応については、「いのち」の大切さについてよりイメージが広がり、妊娠や出産についても正しい知識が得られた。保護者の反応についても、この授業をきいて自分の子どもに「子どもが産まれた時のことを話してみようと思った」という保護者が95%であり、子どもと家庭でのいのちの誕生について話すきっかけになったと考えられる。また保護者では87%が、性教育は、「学校と家庭で取り組むことが重要」と考えており、助産婦を含めて考えるものは77%と授業前の49%から増加していた。授業を受けて、助産婦が性教育を行う有効性を評価したものと考えられる。

以上のことから小学校で行われる性教育に、施設内の助産婦が加わることによって、その専門性を生かした効果的な授業が展開でき、性教育カリキュラムの実践に有効であると考えられた。